



## 研究と人間と

●  
玉田 薫 Kaoru TAMADA

九州大学 先端物質化学研究所 副学長・教授



巻頭言執筆にあたり、20代から約40年間私と行動をともにしてきた絵をご紹介します。誰の作品でどこで購入したのか覚えておりませんが、赤い髪の少女が青い太陽に向かって両手を伸ばしているもので、夢を追い続けたいという気持ちが表現されているように私には思えました。当時の気持ちを思い出しつつ、これから化学の世界で活躍を目指す若手研究者に向けて、私の思いの一部をお伝えします。



1つには研究（学問）は恐れるに足りないということです。研究を始めた当初、数えきれないほどの優秀な研究者が生涯をかけて研究を進める中、いまさら私ができることは何もないのではないかと思ったものですが、これは誤りです。これまでもそして今も、いくつかの偶然的「発見」を除き、研究者はすでにある方法論で解決できる課題を黙々と解いているのであって、世の中にはわからないこと、できていないことがいまだ山ほど残っています。「できた」「成功した」と書かれた論文の山に騙されないことです。社会は常に新しい才能を求めています。

そして研究は常に「自由」なものであるということです。こうじゃなければいけないという決まりのようなものはありません。30代の頃に偶然吉川弘之先生の「知の統合」に関する講演を聞く幸運を得ました<sup>1)</sup>。科学は分類と表記、体系化により発展してきたけれども、それはあくまで便宜上人間が作り出したもので、自然界も社会も切れ目なく繋がっています。唯一分子を創り扱える学問であるという化学の強みを活かしつつ、そこで習ったやり方に固執せず、思うままに自分の知性・感性、創造力を発揮して下さい。

最後に、研究は人間が行う活動であるために、文化や教育の影響を色濃く受けるということです。例えば国によって文化や教育が異なると研究のやり方・考え方も大きく異なってきます。なぜ研究者に留学が必要かと言えば、究極の目的は人脈形成でも技術習得でもなく、異なる文化を体験することで五感を磨き、異なる意見に触れることで人間としての幅を広げることだと思います。留学に限らず、個人としての様々な経験は研究に新たな活力を与えます。すなわち人生を豊かにするための行動と研究力（特に独創性）強化は二者択一的なものではなく、むしろ車の両輪のようなものと思います。

近年日本社会にもダイバーシティ・インクルージョンの考えが普及するようになりました。これはジェンダー平等や国際化の問題に限らず、様々な才能をきちんと評価し、社会に組み入れていくことの重要性を説くものです。世の中には誰一人として同じ人間がいないわけですから、全員が独創的な活動を行える可能性を秘めていると思います。皆の個性を受け止められる度量の大きな社会の構築が望まれます。

1) 日本学術会議 提言「社会のための学術としての「知の統合」—その具現に向けて—」平成23年8月19日。